

母性観の推移(1)

——英国を中心に——

平 林 美都子

Changing Motherhood(1)

Mitoko Hirabayashi

母不在の母性崇拜

子どもの誕生と教育

西欧における母性崇拜の起源はキリスト教神話に源を見ることができる。『創世記』には神による宇宙創造と人間の始祖であるアダム、イヴの創造、ついで禁じられた木の実を食べた人間が神によって楽園から追放される過程が語られる。最初に蛇の誘惑に負けたイブに対して神は、「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する」と罰を宣告した。続いて神はアダムに「お前は顔に汗を流してパンを得る」という罰を下した。ここでとくに注目したいことは、イブ(女)の子産みの苦しみと男性による支配は神に背いた罰であったという点である。イヴの行為によって女性の地位は格下げされた。ところが女性の罰であった出産は、マリアによって聖なる母の行為に浄化された。女性は母になることによって聖なる存在になることができたのである。

マリアによって母としての存在理由が女性に与えられたというものの、歴史の上で母性の概念が生まれるのはずっと後になってからである。母性の概念の誕生は子どもの概念の誕生と一致している。フィリップ・アリエスによれば、1760年以前には子どもは小さな大人とみなされていた。人生の中でも幼年時代が特殊なものとしてみられるようになったのは、歴史的には比較的最近のことである。十八世紀後半のフランスの啓蒙思想家たちは、個人の幸福を第一に考える、新しい家族の理想を取り入れるようになった。そしてそれまでの一般的な考え方や実生活と対立するような、新しい子どもの世話と教育に関する概念が提唱されてきた。後から述べることになるジョン・ロックら英国の哲学者の影響を受けた啓蒙思想家たちは、子ども時代の環境によって心理的特性が形成されると主張した。従って彼らは、子どもが生まれてから数年間乳母のところで育てる従来の習慣を非難し、愛情のある両親、とくに母親によって子どもに良い環境と配慮が与えられるべきだと考えたのである。子どもへの関心のはじまりが母の概念

に影響を与えることになり、母親に対して母性愛を訴えるような著作が出版された。ルソーによる『ジュリーあるいは新エロイズ』(1761)とその続編『エミール』(1762)は、こうした啓蒙思想運動の一貫だった。ルソーは、初期教育は家庭の母の手に委ねられるため、女が母となる準備の教育が必要だとして、次のように述べている。

「女の教育」は男性に関連するべきである。男性の気に入ること、男性の役にたつこと、男性から愛され尊敬されること、男性が幼いときにはこれを養育し、成長すれば身の回りの世話をすること、男性を慰めること、男性のために生活を楽しく心地よいものにしてあげること、これらがあらゆる時代を通じて女性の義務である（『エミール』第五編）。

ルソーの主張は、女性は男性に従うのが生涯の勤めであるから、女子教育ではそうした束縛に慣れておくような心理的な訓練をしなければならないというものである。つまり女性に母であることや母性愛を求めること、それを女性の「本性」とみなした女子教育は、ひとえに男性のためのものだったのである。

『新エロイズ』のジュリーはまさに新しい家族を担う女性だったといえよう。ジュリーは自分の娘に対して完璧な教育をした結果、娘は母を真似ようになるのである。ところが息子の教育については違っていた。彼女は男の人を教育したいと望むほど生意気ではない、と言いきるほど女の領分をわきまえていたのである。

英国における子ども事情

英国で、とくに中産階級の家庭における子どもに対する変化は、十七世紀の後半から見られるようになった。それまでは「サー、マダム」と両親を呼んでいた子どもが、十八世紀の初頭になると「パパ、ママ」と呼ぶようになるなど、親子の関係は大きな変化をみせてきた。歴史学者ローレンス・ストーン の著作『1500年から1800年における英国の家族と性と結婚』(1977)を参考にして、当時の、とくに母子関係がどのように変わってきたのかを見ていきたい。

生まれたばかりの子ども对本性については四つの考え方があった。第一は、原罪を持って生まれてくるという伝統的キリスト教的な見方である。これによれば子どもは絶対的に両親や目上の者に従い、その本性を矯正することが必要だった。第二は、子どもは白紙の状態で生まれてくるので環境がその性質を決定するという見方である。三番目は子どもの本性は受胎の段階ですでに決定しているとする、生物学的見方である。第四は、子どもは善なる存在として生まれてくるが、社会生活での経験によって墮落するという考えである。最後の考え方はもともとルネッサンス期のヒューマニストらが主張していたものだったが、カルヴィニストの教義のもとで抑圧されていた。

十七世紀末にジョン・ロックは第二の環境要因説を一般に広めた。彼の『教育についての考察』(1693)が出たのはちょうど1689年の名誉革命の直後であり、教会や国家の権威が失墜し

基本的人権が成立するなど、子どもに対して愛情を持った養育方法を受容する土壌は十分出来上がっていた。彼はその著作の中で、幼児期には子どもを親に従わせ、精神的な分別のある年齢になったら親の権威を行使するのを控えるようにアドバイスした。

下層中産階級の家庭では、子どもは原罪を持って生まれてくるからそれを矯正しなければならないという、ピューリタンの考え方が依然流布していたようである。しかしピューリタンの権威主義的厳格さと、十八世紀の終わりから十九世紀初頭にかけて、とくに中流上層階級の人々の間で広まった福音派の権威主義的な道德観とは、幼児期の厳しいしつけという点で似通っていたともいえよう。十八世紀の後半、教育改革者でありまた福音主義を信奉したハナ・モアが「子どもが無垢な存在だと考えるのは基本的な過ちだ」と、子どもの矯正の必要を説いていた。下層中産階級では、子どもは無垢な存在として生まれてくるというロックの概念は、結局受容されなかったようである。

人口の圧倒的多数を占める貧民層では、子沢山の上に絶えず経済的に困窮しているため、子どもたちに養育と呼べるような配慮はなかった。酒を飲んだあげく子どもに暴力をふるうのはよくあることだった。子どもは七才になると働くことができたが、少なくともそれまでの食と住居は、貧民層にとり大きな負担だった。十分な食物を与えられず虐待にさらされる子どもや捨てられた子どもたちの死亡率は、当然のことながら非常に高かった。1722年以後には教区に貧民収容所が作られたが、たとえそこに送られたとしても、子どもの死亡率は相変わらず高かった。キャプテン、トマス・コラムは、貧困のために生まれたばかりの子が殺されたり道に捨てられたりする状況を憂い、1741年にロンドンに「ロンドン孤児院」を創設する。当初は受け入れる子どもの人数を制限していたが、1756年に議会在この施設を英国中に開放すると、結果は惨憺たるものになった。一人の捨て子に対する報酬として1〜2ギニー¹が支払われたこともあり、金目当てとする「捨て子運搬人」や行商人などによって、国中から一年に3〜4000人の子どもたちが孤児院に集められたのである。しかし四年間に集められた15,000人の子どものうち、10000人が死んでしまうという結果だった。

子ども用の衣服が普及するものずっと後になってからだった。十七世紀の貴族階級の男子は六、七才で成人男子と同じ服を着るようになり、養育も女から男の手に代わったと言う。十八世紀の初期になると、男子は三、四才から、女子は二才から、父母の着るようなスタイルの服を着たと言うことである(図1)。1760年以降になるとようやく、子ども用の衣服が考案されるようになった。新生児の身体を布でぐるぐる巻きにするそれまでの「スオッドリング」(図2)は、すでにロックが強く反対していたが、実際にそれが廃止されて、乳児が自由に足を動かせる衣服に代わるのは1770年以降であった。これによって、母や乳母が子どもを抱いたり愛撫することを可能にしたと考えると、衣服の変化は子どもに対する親の態度の根本的な変化をもたらしたといえよう。

十八世紀の半ばには、上流階級の家庭では子どもに乳母を雇うことが習慣だった。これは授乳によって乳房の変形を恐れ、夫が授乳する妻を嫌がるなどの理由からだったようだ。医



図1 中流階級の友愛家族。1780年頃



図2 スウォッドリングされた子ども。ジョン・セント・ジョン卿の赤ん坊。
ウィルトシャー，リディアード・トレゴゼ。1634年頃。

者や宗教家からは母親が授乳すべきだという強い主張があり、また乳母を雇う費用が年に25—50ポンド（1740年代）かかるため²、実際にそれを支払える階層は限られていたが、それでも富裕な上流階級の母親の大部分は乳母を雇っていた。こうした傾向に変化が生じるのは十八世紀の後半である。乳母になる労働者階級の女性の不衛生な環境や怠惰がもつて、乳児の死亡率が増加したことや、高貴な女性が自ら授乳したこと（1786年、フィッツウィリアム伯爵夫人）などが、ヨーロッパに先駆けて母親による授乳を促す原因となった。さらに1840年代にコレラが流行したこともこのブームに拍車をかけ、母親が自ら授乳することが自然で健康的なことだとみなされるようになったのである。

「母性」の誕生

英国の十九世紀は、女性性の理想像としての「母」の立場が確立した時期である。「母」がさまざまな分野で語られるようになったこと、すなわち母の言説そのものの誕生は、母の地位の重要性を物語っているだろう。まず1851年の人口調査ではじめて妻／母のカテゴリーができた。医学的言説は、母性と結びついた女性性が社会的に意味があるだけでなく、それによって医学的に正常であり健康であることを示した。十九世紀の前半、女性の健康と婦人医学が専門医学の分野として登場した。内科医と産科医であるサミュエル・アッシュウェルは、『女性特有の病気に関する実際の論文』（1844）の中で、母性の欠落の症状としてヒステリーについて述

べている。

「子宮の状態の異常によるヒステリーは、他のケースよりも非常に多いと思う。少女期に月経が順調で、幸せな結婚をし十分早い時期に母親になり、子どもを授乳した女性は、めったにヒステリーにならない。萎黄病（貧血の一種）が長引き、思春期や月経が不完全だった少女、晩婚の女性、性格の不一致などで間隔をおいて出産した女性、流りの生活をしたいためか、またははっきりしない理由から授乳しなかった女性、若い未亡人や独身女性のすべてにおいて子宮の異常が疑われ、その多くは実際に異常がある。そのような人は共通してヒステリーがみられる。」(Nead 25-6)

結婚と母性はこのように医学的規範として定義されるようになった。早く結婚し子どもがたくさん生まれ自分で授乳した女性は健康であり、この規範から外れた女性は病気になるというのである。つまり妻や母にならないような、社会的に逸脱した女性は、医学的に異常と定義されたのである。トマス・ブルは『母への手引き書—妊娠中の健康管理』（1842）と題する本の中で、妊娠中は食事を控えるように、乳房が張りすぎたときには蛭で血を吸わせるなどの、非常識な「手引き」を妊婦に与えていた。しかも彼は、死産などの事故は母の心がけで防ぐことができると、母の責任とそれを怠った場合の罪の重さを指摘していた³。

母性愛は女性性の清純さの指標でもあり、他の人間関係の模範となるものと考えられた。リンド・ニードは、ヴィクトリア朝の母性崇拜に先だって、キリスト教の伝統も重要な役割を果たしたと指摘している。聖母マリアとキリストの図像は、カトリックの教義がそこから捨象され当時の中流階級文化に位置づけられて、プロテスタント的な価値を体現する母性愛の典型であったのである(Nead 26)。

医学の分野で母性に焦点があてられる頃、絵画の題材としても母性は好んで取り上げられるようになった。聖母子像を連想させるC. W. コープの『母と子』（1852）(図3)は慈愛にみちた母の姿が描かれている。1840年代のコレラの流行と「飢餓の時代」が、衛生面と道徳面から、労働者階級の乳母に子どもの授乳を任せる風潮を見直すきっかけになると、母親自ら授乳する姿も題材とされた。例えばC. W. コープの『若い母』（1846）(図4)は、子どもに愛情深い目を注ぎながら授乳する若く純真な母が描かれている。ジェイムズ・コリンソンの『子ども時代』（1855）(図5)は、まだ幼い少女が妹に対して愛情深い小さな母役を勤める様子が描かれている。髪を大人のように上にまとめて妹をやさしく見つめる姉の「母性」は、壁に掛けてある、子をあやす母の絵によって、そのメッセージ力は強化されている。

「母性」の指導書

1844年、サラ・エリスは『英国の母—彼女たちの影響と責任』において、母の義務から逃れることはできないのだからそれを真剣に考えなければならないと、若い娘たちに忠告した。母



図3 C. W. コープ, 『母と子』, 1852年。



図4 C. W. コープ, 『若い母』, 1846年。

The Ideal of Victorian Girlhood



図5 ジェイムズ・コリンズン、『子ども時代』, 1855年。

の義務とは子どもの身体的、精神的、宗教的な養育である。またサラ・ルイスも、『女性のミッション』(1840)で宗教的な側面での母の役割を強調している。ルイスは、女性は男性の幼児期の守護神としてのミッションを課せられていると言う。これらの指導書には家庭内の父親の役割についてはほとんど言及されていなかった。

確かに十九世紀の女性にとり、母性はもっとも大切に自然なミッションとされた。母になることこそ女性が一番の存在理由であり、彼女が一番の喜びだと考えられたのである。ルイスによる女性の指導書を絵画の分野で行ったのが、ジョージ・エルガー・ヒックスの三部作『女性のミッション』(1863)(図6, 7, 8)だといえよう。第一の絵は『子ども時代の指導者』、第二は『男性の連れ合い』、最後は『老人の慰め』である。この三部作で注目したいのは三枚の絵の順序である。「母」が一番目にあげられているのは、それが女性のミッションのうち第一に重要であるというだけではない。「母」→「妻」→「娘」という順序が示唆しているのは、女性の役割とは結局男性の生涯に合わせたものなのだとということである。男性が幼い時には母として、成人すれば妻として、老いた後には娘として、女性の義務は「男性のために生活を楽しく心地よいものにしてあげること」(ルソー)なのである。ルイスもまた、母親が知性を磨くのは子どもたちのため、とくに息子のためだと断言している(McKnight 7)。

苦しむ母—ヴィクトリア女王

19世紀の母性の理想を体現するのはヴィクトリア女王だった。9人の子どもを産み、繁栄する大英帝国の元首として、まさに公私ともに理想の母とみなされていた。しかし娘にあてた彼女の手紙には、母性について驚くほど否定的な意見が述べられているのである。女王は出産が「危険であり苦痛であるだけでなく、たしなみの感情に対する完全な暴力行為」であり、「若い娘がもしすべてを知っていたら、決して結婚の誓いなどできないでしょう」(Fulford 159)とまで言う。彼女にとってセックスと出産はともに堪え忍ぶべき受難だった。そして受胎そのものも男性だけの責任だと信じていた。

「私たちが経験しなければならないことは実に苦しくて恐ろしいことであり、男性はそのことに対して賞賛すべきであり埋め合わせのためにあらゆることをしなければならないのです。結局男性だけがその原因なのですからね。不公平な取り決めですが、私たちは静かに忍耐強く我慢して、仕方がないことだと思って忘れなければいけません。私たちが清純で慎み深い感情を保っていればいるほど、それを乗り越えるのが後で楽になるでしょう。」
(1859年, 3月9日)

後になって娘や孫娘の妊娠を知ったときも、彼女は「ぞっとする知らせ」(159)だと語っていた。彼女にとり出産は「牛や犬のように」(160)感じられ、生まれた子どもにしても小さいころ一三〜四ヶ月は「好きにはなれない」とまで娘に書いていた(1859年3月16日)⁴。



図6 ジョージ・エルガー・ヒックス、『女性のミッション：子ども時代の指導者』, 1863年。



図7 『女性のミッション：男性の連れ合い』, 1863年。



図8 『女性のミッション：老人の慰め』, 1863年。

実在のヴィクトリア女王は無私の理想的な母でなかったにもかかわらず、エリスの指導書『英国の妻』(1842)(図9)には、女王の家庭生活の社会的美德が英国の女性の模範になるという献辞がつけられていた。また絵画においても、母なるヴィクトリア女王の姿が当時の母性崇拜に大きな影響力を与えたのはいうまでもないだろう。ウィンターホールターの『ヴィクトリア女王とプリンス・アーサー』(1850)(図10)は中流階級の母子を思わせる絵である。庭の一角に座り、胸に抱いた王子に慈愛にみちた目を向けている女王の私的な母の姿は、理想的な母性像として国民に強い感化を与えたであろう。ホーズリーの『ヴィクトリア女王と子どもたち』(ca. 1865)(図11)も、七人の子どもたちの中に立っている女王の、忍耐強く献身的な母の姿を描いている。



図9 『イギリスの主婦』の扉絵 1842年。



図10 F. ウィンターホルター、『ヴィクトリア女王とプリンス・アーサー』, 1850年。

十九世紀文学における母

文学に描かれる母は一方で社会の理想的な母性像を明らかにするとともに、他方、作者の母に対する心理をも明らかにする。例えばディケンズ作品で不完全な母は非難され、理想的な母が求められているのは、現実社会の反映であるとともに、彼自身の母に対する感情を物語っているのである。

理想化された母は現実離れした切り抜き絵のようで、作家でさえあまり関心を持たないと、マージョリー・マコーミックは指摘する(McCormick 20)。確かに十九世紀文学では、理想化された母は物語りがはじまるときにすでに死んでいるという例が多い。例えば『説得』のアン・エリオットや『エマ』のヒロインの母がそうであり、『ジェイン・エア』『ヴィレット』『嵐が丘』でもそろってヒロインは母亡き子である。たとえ母が存在していても、子どもにとり頼りになるような有能な母としてはほとんど登場しない。その大部分が、『高慢と偏見』のベネット夫人(図12)や『フロス河畔の水車場』のタリヴァー夫人(図13)のように、女中への愚痴、食事の計画、娘の結婚が遅いことを心配するなど、日常なことだけに関心を持つ愚かな母なのである。こうした愚かな母はとるに足らない存在として、物語りの中でも焦点をあてられることはない。スーザン・ベック・マクドナルドはこれを「不在の母の伝統」と呼んで次のように説明している。

通常母性を連想する養育は…娘の成熟と自己主張を進めるために否定されてきたようである…ヒロインの母は死んでいるのか弱っているか援助を必要としているので、彼女はときには他の強力な女性から援助してもらおうこともあるが、母からはほとんど助けてもらうことはない(McDonald 58-9)。



図11 J. C. ホーズリー 『ヴィクトリア女王と子どもたち』 1865年頃。



図12 ヒュー・トムスン, 1894年。
(コリンズ氏を断わったことで、エリザベスを非難するベネット夫人、『高慢と偏見』)



図13 C. O. ムレイ, 1898年。
(弁護士のウェイクム氏に水車場を買わないでくれと訴えるタリヴァー夫人, 『フロス河畔の水車場』)

アドリエヌ・リッチも「[母たち] がせいぜいできることは娘に父権制のなかで生きのびる策略をさずけること…男のごきげんをとりその付属品となる手を教えることである」(Rich 91)と、十九世紀の小説の母の無力さを語っている。

小説の中で愚かな母を描き母の無力さを誇張するのは、経済的、法的に権利を持たない現実の女性の状況を反映しているのであろう。1839年の「幼児養育法」では七才以下の子どもの一時的な養育権しか母に認められなかったし、『ジェイン・エア』のバーサの例にみられるように、夫には妻を監禁する権利が1891年まで認められていたのである。依存心を若い女性の美德としながら、それを成熟した女性にとっての欠点とみている社会の二重規範は、そしてまた理想化しながら実際には何の力も持たない現実の母の姿は、作者の描く母像を矛盾に満ちたものにするのである。マコーミックはこうした愚かな母の例をいくつかあげて、1870年代までのイギリス文学において、信頼にたる有能な母は存在しなかったと指摘している(McCormick 8)。反対に力のある母—例えば『荒涼館』のジェリビー夫人—は、普通の女性から逸脱した存在として否定的に描かれるのであった。1870年とは女子に適切な初等教育をする教育法と、既婚女性の財産法が制定された年でもある。特に後者の制定は女性の社会進出の足がかりとして、女性の地位向上における大きな前進であった⁵。また避妊法が普及して出生率が目立って下がってきたころでもあった。社会的法的な変化は、当然のことながら確実に現実の母の状況を変えていき、それに伴い母性観も変容していくのである。

注

- 1, 2 'guinea' は1663年から1813年まで英国で鑄造された金貨。1717年以降、1ギニーは21シリング。1ポンドは20シリング。J. P. Brownによれば、19世紀の貨幣の価値は1ポンド約200ドルだった。ちなみに当時の貴族階級の年収は1万ポンド以上、紳士階級土地所有者であるジェントリー階級は1千ポンド～1万ポンド、その下の労働の必要のない自立紳士階級が700～1千ポンド、女中になると12～20ポンドというように、貧富の差は大きかった。
- 3 Thomas Bull, *Hints to Mothers, for the Management of Health During the Period of Pregnancy, and in the Lying-in-Room; with an Exposure of Popular Errors in Connexion with those Subjects*. 3rd ed. New York: Wiley and Putnam, 1842. McKnightからの説明を使用した(9)。
- 4 Roger Fulford ed. *Dearest Child*.
- 5 Mary Lyndon Shanley, "Equal Rights and Spousal Friendship: The Married Women's Property Act of 1870" 参照。

使用文献

- Aries, Philip. *Centuries of Childhood: a Social History of Family Life*. New York: Alfred Knopf, 1973
(『<子供>の誕生—アンシャンレジーム期の子供と家族生活』杉山光信・杉山恵美子訳, みすず書房)。
- Brown, Julia Prewitt. *A Reader's Guide to the Nineteenth-Century English Novel*. New York: Macmillan Publishing Company, 1985.
- Fulford, Roger, ed. *Dearest Child: Private Correspondence between Queen Victoria and the Princess Royal*. London: Evans Brothers, 1964.
- MacDonald, Susan Peck. "Jane Austen and Tradition of the Absent Mother". *The Lost Tradition: Mothers and Daughters in Literature*. Eds. Cathy Davidson and E. M. Broner. New York: Frederick

- Ungar, 1980: 58-69.
- McCormick, Marjorie. *Mothers in the English Novel: From Stereotype to Archetype*. New York and London: Garland Publishing, 1991.
- McKnight, Natalie J. *Suffering Mothers in Mid-Victorian Novels*. London: Macmillan, 1997.
- Nead, Lynda. *Myths of Sexuality: Representations of Women in Victorian Britain*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Rich, Adrienne. *On Lies, Secrets, and Silence: Selected Prose, 1966-78*. New York: Norton, 1979.
- ルソー, ジャン・ジャック. 『エミール』樋口謹一訳, 白水社 6巻7巻, 1980.
- . 『新エロイーズ』松本勤訳, 白水社—9巻10巻, 1981.
- Shanley, Mary Lyndon. *Feminism, Marriage, and the Law in Victorian England*. Princeton: Princeton University Press, 1989.
- Stone, Laurence. *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*. Abridged edition. Harmondsworth: Penguin Books, 1977.